

## 多和田葉子の文学における「翻訳」の諸相

松 永 美 穂

1982年以来ドイツのハンブルクで暮らしている多和田葉子の創作活動は、この20年のあいだにさまざまな段階を経て変化し続けている。多和田はその文学的才能をまずドイツの友人たちに見いだされ、日本語の作品が日本学者のペーター・ペルトナーによって独訳された形の「翻訳」によってドイツで作家デビューをはたしたという、稀有な経歴の持ち主である。1987年のデビュー以来、活発に活動を続け、当初は日本語のみによる創作だったのが、1988年以降はドイツ語でも創作を始め、1991年には日本でも作家としてデビューをしている。日独両言語で創作するようになってからは、ドイツ語で書いた作品を自ら日本語に「翻訳」したり、日本語の作品をドイツ語に「翻案」するなどの創作パターンも見られるようになってきた。また、二言語が混在する戯曲を書いたり、朗読会で一つの詩を二言語をスイッチさせながら読むなど、言語を使った多和田の実験はとどまるところを知らない。

多和田がどの言語でどのジャンルの作品を執筆しているかを調べてみると、初期の頃の直感的選択（どの作品をどの言語で書くか、直感的に選択していた段階）から意識的選択へ移行しているように思われる。

ドイツ語のテキストの方が「伝達」の要素をやや強く持ち、日本語テキストでは独創的な表現や句読点の使い方などへのこだわりが目立つ。しかし、もともととはもっぱら日本語で書いていた詩を最近ではドイツ語でも書き、ドイツ語で書き始めた戯曲を日本語でも創作するなど、言語とジャンルの関係は固定されておらず、むしろ多和田は意識的に未踏のジャンルに挑戦しているようでもある。

彼女の自作品の翻訳からも、いろいろと面白い現象が読みとれる。（ドイツ語の作品を日本語に翻訳する際に勝手に内容が膨らんでいってしまうなど。）デリダは翻訳を指して「オリジナルが成長する契機のひとつ」と言っているが、自在に変化する多和田の自作翻訳は、作家と言語の関係についての考察を促すとともに、「翻訳」が創作の一部であることを意識させる。彼女の行為はヤコブソンの分類によるいわゆる「言語間翻訳」（1つの言語から他の言語への翻訳）、意味内容重視の伝統への挑戦でもある。そこには①1対1対応という幻想の否定、②「オリジナル」の攪乱、③「意味内容」を重視した翻訳では取りこぼされてしまう「音」「シンタクス」「文字」をめぐる実験（「意味」だけですねり理解できてしまうことを否定する）、そして④行間の翻訳（文字になっていない部分まで読みとろうとする試み。たとえば、ツェランの詩におけるプンクトの話）など、さまざまな試みが見てとれるのである。

2か国語で書く作家たちが増えているなか、そのパイオニアとして言語の境界をまたぎつつ活動する多和田の創作は、文学に対するさまざまな可能性を呈示してくれる。